

---

# 「好きだった」

迅雷

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

「好きだった」

### 【Nコード】

N6197L

### 【作者名】

迅雷

### 【あらすじ】

未来予知能力者の、密かな恋

偶然か、必然か。夢を見る。

夢とは言つても、睡眠中ではなく、昏間の目が覚めている時。「白昼夢」と呼ばれているその現象が邪魔になることもある。しかし大概は身を委ね意識を手放す。

昨日も見た。見覚えのある少女と青年。少女にしては落ち着き過ぎていような気がした。少女が青年の首に手を伸ばす。

見間違いでなければ、おそらく少女は首を絞めている。青年は一切の抵抗も見せない。殺した。

そんなただの、幻想。

ただ困ったことに私の幻想は幻想に留まらず、現実起こってしまふ。本当に後味が悪い。

2

「それはまた愉快的な体験ですね」

「聞いた直後に高らかに笑うぐらい愉快か？」

「ええ、愉快です。しかし」

高貫 渡。目の前にいる男の本名。ぶっちゃけ名前なんて、どうでもいいのだけれども。

高貫は利口ぶった話し方をするのが特徴だ。彼が喫茶店でコーヒーを奢ってくれるというので付いて来た。

「まあ言ってもそれが普通だと思って体験している君には到底理解できるはずがありませんか」

分厚い本を閉じる音。ひとけの無い店内に、高貫の溜め息。

そしておい、なんだその可哀想な人を見るように私を見る目つきは。

私の目に熱海を彷彿させる海岸のポスターが目に入る。その他にはエッフェル塔、エベレスト、富士山。まだまだある。

どこからかポスターを持ってきては、剥がれた壁紙を塞ぐように貼ってしまう。高貫の趣味だからとやかく言うつもりはないが、「少しは喫茶店に合っているもの選べ」と言いたい。

「気持ち悪い」

「誰がです?」

分かってるくせに。

「自分が」

高貫は鼻で笑う。

いや、私は至って真面目だけど。

「そうか? 俺は格好いいと思うぜ。そんな夢を2日も3日も毎日見るんだぞ。まるで録画映像のエンドレスのように。『予知夢』の類なのは間違いないだろ」

「理数系」

「何なんだよその予知能力。マジ有り得ない。あーあー羨ましい、羨ましい。俺にもそんな特性があったらなあ」

「理数系。口調が」

いつもとまるで違う。見たことのない姿に不安を感じる。ネジでも外れたのか。大丈夫か、こいつ。

高貫は下がった眼鏡を少しだけ上げる。

「 済まない。柄でも無く少し取り乱しました」  
「 おいおい大丈夫か？」

主に頭が。

「 オカルトな話題について興奮してしまったze」  
「 まだ駄目じゃん！」  
「 冗談です」  
「 冗談か！」

高貫は何でもなかったかのように再びコーヒーに口を付ける。対して、私はその行為を見つめるしかできない。

だって両手首がロープでガチガチに縛られているから。少しも動かせない。しかも食い込んで来てとても痛い。

「 いい加減ロープ外せ。そしてできれば僕にもコーヒーを」  
「 ああ忘れてました。はいはい今外してあげますよ。お嬢さま」

私は別にお嬢さまでもなんでもない。これがこいつの冗談ってやつなのかは定かではない。

「 一体何がしたかったんだ？」  
「 君に『もつとして』って言わせただった」  
「 理数系。普段冗談言わない奴が冗談言っちゃいけないって、知ってるか」

「 逆狼少年のことですね。絶望先生でもそんなことを言っていましたね」

「 お前が少年マガジン派なのはよくわかった」  
「 いえ、私はサンデー派です」

へえ、意外とこんな奴でも漫画読むんだな。しかもサンデーか。ジャンプという予想は外れてしまった。

「ゲツサンだ」

ゲツカンサンデー。略してゲツサン。……なんと言つか。予想外過ぎて言葉にできない。

「というより冗談なら常日頃から死ぬほど言ってるから、私は逆狼少年には当てはまりません」

「へえ、例えば？」

「自分の名前とか」

「うわあ。いきなり冗談。さすが」

「あ、はい。コーヒー」

「ああどうも……」

「飲んでる途中ですけど」

「飲みかけか！」

危ない。こいつ危ない。

同級生の手首をロープで縛るサドの上、さり気なく間接キスマで狙ってきたよ。

ある意味。私が予知能力者なら　　百歩譲っても認めたくはないのだけど　　高貫は二重人格者と言っても間違いではない。

学校で見せていたクールな姿の高貫がどんどん霞んでいく。さらば理数系。初めまして人格破綻者。仲良くしてくれ。

「おい人格破綻者」

試しに言ってみようという気になり気がついたらもう言ってしまう

っていた。思いつきでの安易な行動。馬鹿らしい。なんと愚かしい真似をしたんだろう、と客観視できる自分がいた。

物思いにふけていた高貫は私の声が届いたのか、思考をいったん中断し顔を上げた。鷹みたいに鋭い目線。私しか映っていないと考えると途端に怖くなる。いつもは道化師みたいにおちやらけているくせにそんな表情をするなんて、道化師失格。辞めちまえ。

「『理数系』は？」

まるで幼児を諭すように訊きなさる。一応、高貫にとつてもお気に入りのお名前だったということかと私は解釈しておくが、果たしどうだろう。真意は定かではない。

何より当然、知りたくない。

「やめる他に道はない。あだ名つてその人を示す言葉だろ。その人の特徴とまったく違うあだ名は付けちゃ駄目だと思うんだ」

「だからって君ねえ『人格破綻者』は酷い」

同級生じゃないですか、と高貫は言う。ついさつきまで私という同級生の手首を思いつき縛っていたお前には言われたくないのだけれども。

「私つてこういう性格な訳です」

誰がだよ。

視線を下げるとほのかに紫色に変色した肌が見えた。なるほど、縛られた所が内出血してやがる、と軽く受け入れてすぐ目をそらす。キスマークの次に嫌な色。

それにしても、どうやら人格破綻者は破綻者呼ばわりがお嫌いらしい。高貫自身がそう断言したのでまず間違いない。珍しく彼にと

つては冗談じゃない状況なのだろう。

「じゃあ使い分けるよ」

「それでいい」

いいのかよ。

「理数系も飽きて来てたし」

「飽きただと」

「ああ、飽きた。凄く飽きた」

「僕のネーミングセンスを疑っているのか」

それは高貫自身が人格破綻者と認めたことになる。さっきの一言は即興のあだ名が高貫公認になった動かぬ証拠となるはずだ。

「と、いうのは冗談です」

「いったいどこからどこまでだ」

「さっきの『飽きて来てたし』から」

「意地悪だなあ。性格がひん曲がっているらあ」

私が、高貫の唾液が多少なりとも混ざっているかもしれないコーヒーに手を伸ばしかけた時、高貫はそういえば、と不意に何かを思い出したように呟いた。

「そもそもコーヒーを奢ると言ったことについても深い意味は無いんですけど」

「帰る。こちとらお宅の思いつきにいちいち振り回されるほど都合よく暇にはできていないんだよ」

「少々お待ちを」

「何だよ」

「学校では理数系と呼んでください」

「冗談じゃないってか？」

「冗談じゃないです」

「冗談じゃないって言葉、よく考えたらそれ答えが二つあるよな。だつたらさあ、どっちだよ。」

「僕の夢の登場人物ってさ。実は人格破綻者と僕だけなんだぜ」

まだ誰にも言っていなかったけどさ、とオマケに付け足しておく。吐き気がする。甘いコーヒーの匂いで怠くなる。 いやい

や、これって麻薬みたいな危ないものでも混ぜてんじゃないのか。ならやつぱり、いかれてる。

男を絞殺する夢も、その男に好かれる現実も。

「ふーん」

「可笑しいよな」

「ええ可笑しいですね」

高貫は私の今日一番の告白をまるで他人ごとのように受け止めて流した。

無視したな。上等。死ぬ。車にひかれて命をたっていたあの猫のようにあつさりと生命を終わらせれば良い。何だかんだ言っても殺すのは私なんだけど。

あの胸くそ悪い予言の通りなら、いつかきつと、私は高貫を絞殺するのだ。今日も明日も明後日も、またその次の日も高貫いて、手はあれよあれよという間に首を掴んでる。

楽観主義の自分が言う。寧ろ良い。普通は経験できないことを何回もできるのだから。

悲観な自分が言うのだろう。幼なじみを殺すのは何とも気が引け

るのだと。

視界の端で高貫が動く。気がつけば、高貫が上で私は下だった。こんな奴に抱かれるのか、と特別に焦る様子のない自分に一番びつくりする。

「青少年舐めんな」

「笑わせんな。美少女押し倒しておいて誰が青少年だ」  
「だから」

高貫の息が耳を撫でた。

「舐めんなってば」

その後何があつたかは定かではない。

性行為の後に、高貫の首に手をかける。  
…いつそ今、ここで殺してしまおうか。そうすれば、もう夢は見ない。断定できる。

「何か言い残すことは？」

「君に殺されるなら本望です」  
「何じゃそりゃ」

冷たい首筋に力を込める。高貫は微かに呻き、苦しさに顔を歪めながら、それでも私を見続ける。

君に殺されるなら本望です。

駄目だ。ベタ過ぎるだろ。

高貫の濁いた唇が静かに言葉を紡ぐ。

「好きだった」

(後書き)

はい、下手糞です。

約一年ぶりか…もう大学受験か…。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6197/>

---

「好きだった」

2011年1月16日03時32分発行